

所蔵資料展示

伊賀と忍者

令和元年六月二十日（木）～八月二十一日（水）

三重大学附属図書館

-ごあいさつ-

この度三重大学附属図書館は，館蔵貴重資料と伊賀サテライト伊賀連携フィールド所蔵本とあわせて15点を資料展示「伊賀と忍者」として公開することにいたしました。

現在の三重県伊賀市と名張市は旧伊賀国に相当する地域で，江戸時代は藤堂藩の領地の一部であり伊賀・伊勢一体となって発展してきました。

三重大学の遠い前身にあたる藩校有造館の分校崇広堂が伊賀にあり，講堂など貴重な史跡が現存しています。また今回の展示品「三重県郷土史」に三重県師範学校の生徒の調査学習の成果が収められるように，学習のための人的交流がさかんに行われていました。

三重大学の四つの地域拠点サテライトのうち伊賀サテライトが最も古く設立されています。伊賀サテライトには伊賀研究拠点・伊賀連携フィールド・国際忍者研究センターの三つの機関が所属し，伊賀市や地域企業と連携して地域の発展に尽くしてきました。

伊賀は豊かな自然に恵まれ、文化的には俳聖松尾芭蕉の出身地として知られてきましたが，最近では忍者が活躍した忍者の聖地としても世界的に注目を浴びています。二年前に開設された国際忍者研究センターは資料の収集につとめております。

展示は伊賀の地理，歴史，社会風俗，事件および歴史的な忍者の実際と作られた忍者像について紹介したものです。本館館内二階フロアで同じく「伊賀と忍者」をテーマとした一般書架の本を集めた展示を行っております。こちらは手にとって御覧になれるほか，本館利用者に貸し出しも可能です。三重大学では教養教育や人文社会科学系研究科大学院で忍者学を学ぶことができます。今後も三重大学附属図書館が学生ばかりでなく，地域の方々をご支援できればと思っています。

令和元年６月　三重大学附属図書館館長　梅川　逸人

【展示凡例】

書名、読み（ひらがな）、ジャンル、刊・写、書型（サイズ）、巻冊数、編著者名、序跋者、刊行・成立年、版元（出版地）、旧所蔵元、架蔵番号、項目担当者名の順で記述。

1. 伊賀国輿地図　いがこくよちず

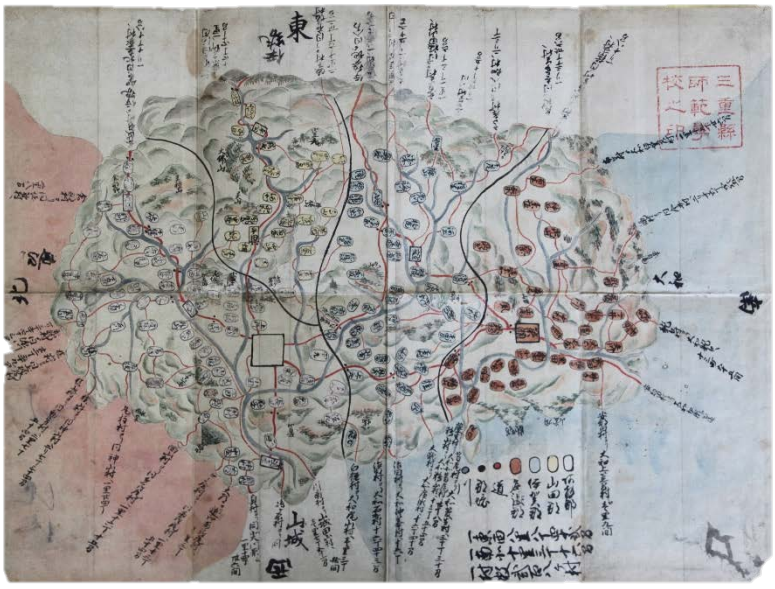
地図、写、縦 55.0cm×横 41.0cm、一舗、（伊勢洞津）鈴木重遠写字・（武蔵下谷）澤田易信写図、享和元年(1801)成、三重県師範学校旧蔵、貴重書庫 092.59/I 23。



江戸時代中期以降に作成された伊賀国の地図である。207 ヶ村。写字は伊勢の人物によるが、写図は江戸の人物によってなされている。「輿地図」は「すべての領土の地図」を意味する。南を上に描くほか、各郡で色分け・境界を描く。各道が隣国のどの村と接しているか、詳細に記す。各村々の情報が詳細に記されている。『伊水温故』（上野市古文献刊行）の巻末附録の沖森直三郎旧蔵「伊賀国全図（宝暦頃筆）（209 ヶ村）によく似ている。　（八賀穂高）

2、伊賀全国図　いがぜんこくず

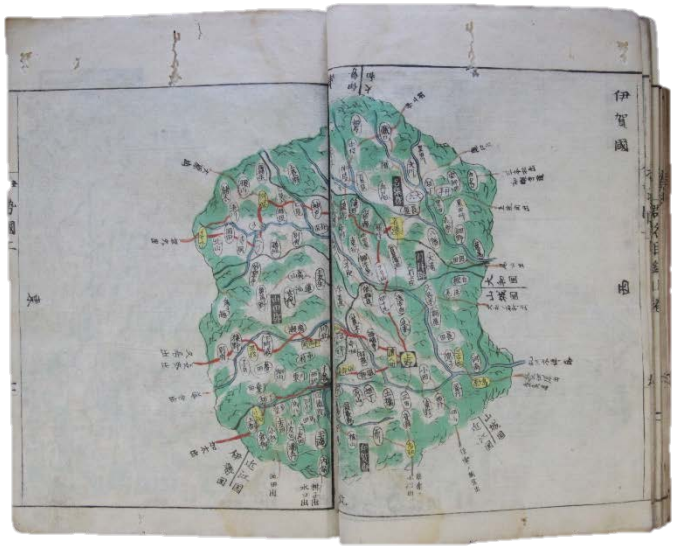
地図、写、縦 53.5cm×横 40.0cm、一舗、作製者不明、成立年不明、
三重県師範学校旧蔵、貴重書庫 092.59/I 23。



この地図には作製者・成立年に関する記載が一切ないが、1「伊賀国輿地図」同様、江戸時代中期以降の伊賀国の地図と思われる。208 ヶ村。「伊賀国輿地図」同様、南が上で各郡が色分けされ境界が描かれているが、この地図では上野城および城下町が白抜きとなっている。その一方で、隣国村に関する記述は詳細に記されている。1「伊賀国輿地図」に比べて山々をよく描きこんでいる。　（八賀穂高）

3、国郡全図　こくぐんぜんず

地誌、刊、大本（26.3 cm×18.8 cm）、2 巻 2 冊（下巻欠）、青生東谿著、文政 11 年（1828）刊か、三重県師範学校旧蔵、貴重書庫 291.038/A 51。



各国を一図に表した国絵図。左右と上下、東西南北の表記は国ごとに統一されておらず、さらには実際の地形と比べると実測が異なるため、読む際には注意を要する。本図は南を上に描き、阿拝郡と伊賀郡の位置が逆になっている。のちに阿拝郡と山田郡が合併して阿山郡に、名張郡と伊賀郡が合併して名賀郡となった。　（西村佳朗）

4、日本諸国六十八景　にほんしょこくろくじゅうはっけい

絵図、刊、大本（24.8 cm×18.5 cm）、一冊、歌川広重（2）画、文久 2 年（1862）刊か、蔦吉版、三重県師範学校旧蔵、貴重書庫 721.8/A 47。



二代目歌川広重（1826-92）の名所絵『諸国六十八景』の絵本版。本書は三重大学のほかに、国立国会図書館と名古屋市蓬左文庫のみの伝存。国会版とは綴じが異なるが、これは国会版の所有者が綴じなおしたものと思われる。当初の構成では、よく似た構図を見開きで配している。展示箇所の「伊賀名張」は中洲を挟んで橋のかかった名張川を描いたものであるが、淵上旭江（1753-1816）の名勝図絵『山水奇観』後編（享和 2 年（1802）刊）「伊賀名張」で描かれた名張川の絵を参考にしたと思われる。　（西村佳朗）

5、三重県郷土史　阿山郡・名賀郡・志摩郡・河芸郡　みえけんきょうどし

地誌、写、半紙本（22.7 cm×15 cm）、5 冊、三重県師範学校生徒著、三重県師範学校旧蔵、貴重書庫 092.51/Mi 15。



三重大学の前身のひとつである三重県師範学校の生徒が、長期休暇中の課題として各生徒の郷里について調査した調べ学習の成果が本書である。本書は生徒それぞれの自筆であり、地図も生徒自身の手による。地図は彩色など意匠をこらしたものがあり、本文に目を向けると地理教育に関する生徒の意見なども含まれている。展示はかつての三重県名賀郡依那古村（現伊賀市依那古）の地図と「所謂伊賀者トシテ有名なる郷士」とその活躍に言及してある箇所。

（西村佳朗）

6、校正伊乱記　こうせいいらんき

戦記、写、半紙本（22.2cm×14.8cm）、8 巻 3 冊、菊岡如幻編、百地織之助例言（明治 30 年（1897））、明治 30 年刊、（阿山郡上野町）摘翠書院版、三重県師範学校旧蔵、書庫 092.1/Ko 83/1～3。

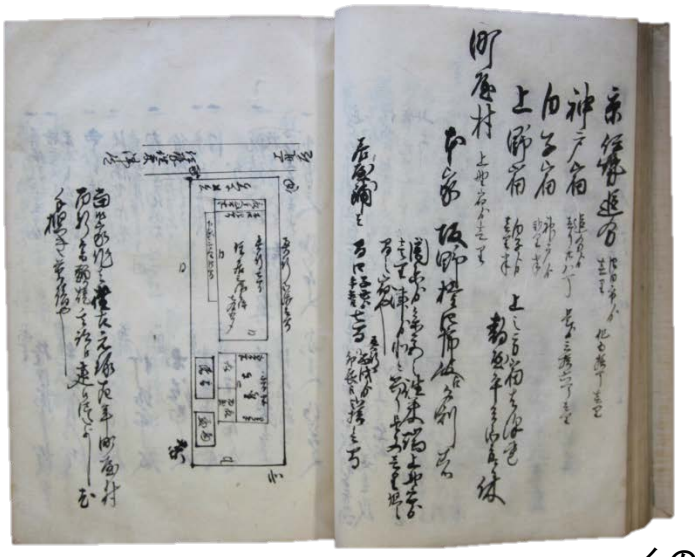


織田氏と伊賀惣国一揆との戦い「天正伊賀の乱」に関する書物。江戸時代に写本で伝播した『伊乱記』には著者名が基本的に記されていないが、延宝 7 年（1679）菊岡行宣（如幻）跋のある本の発見により、現在では伊賀の住人菊岡如幻の編著と考えられている。展示本『校正伊乱記』の編者百地織之助は喰代（伊賀市喰代）の住人であり、『伊乱記』に登場する有力土豪百地丹波の子孫と思われる。巻 1「伊陽時に応ずる風俗の事」では、正慶（1332 頃）から天正中頃（1578 頃）における伊賀地域の生活・風俗を垣間見ることができる。未明から正午までは家業に励み、午後からはひたすら武芸のほか「惻隠術」の鍛錬をしていた。「如何なる堅固の要害にも、忍び入らずといふ事なし」とて「伊賀忍」として他国にも重宝されていた。展示本は他本と異同があり「詞をかけずして、不意に敵を討つ事は本意に背くとて深く嫌忌す」と現代の忍者イメージとは異なる姿も描かれる。

（福島嵩仁）

7、伊賀者道中日記　いがものどうちゅうにっき

紀行文、写、半紙本（23.5cm×16.5cm）、1冊、坂野佐太郎著、弘化5年（1848）成、
高嶺文庫旧蔵、伊賀連携フィールド915.5/Sa 34。

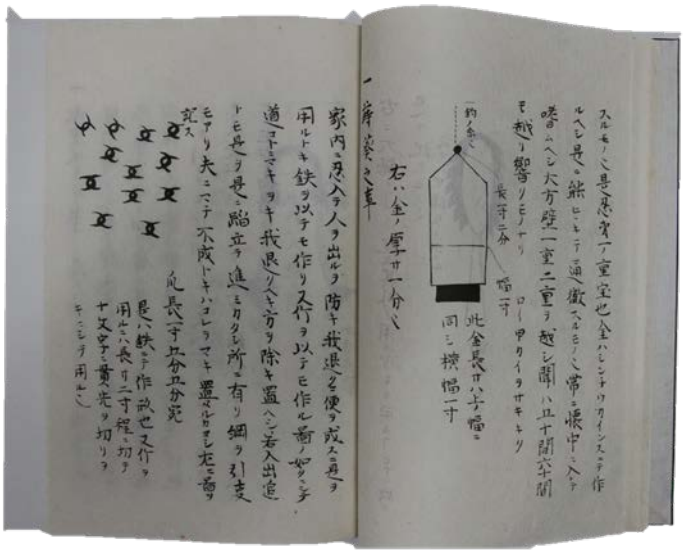


表紙の左肩に直書「五畿内五海道之内巡覧日記」。原表紙は「五畿内五海道之内巡覧日記　弘化五申年二月　坂野佐太郎」。著者は武蔵国豊嶋郡隠田村（現在の東京都渋谷区神宮前周辺＝原宿）の百姓の坂野佐太郎である。隠田村は当時江戸幕府伊賀者の知行地であった。彼の旅の最終目的地は「長崎・熊本」と記されているが、その理由はこの史料では明らかにされていない。佐太郎の伊賀者との直接的な関係は不明であるが、同行した妻・息子の道中手形が領主である伊賀者による発行であること、佐太郎が道中に数多くの手紙を「御屋敷」に送っていることから、各地の情報収集の旅の可能性がある。史料の内容は、諸国の領主・城下町などの情報、各地の寺社仏閣や名所旧跡の情報が中心で、記述はいずれも詳細である。注目されるのは、伊勢国町屋村（現在の津市栗真町屋町、三重大学所在）に佐太郎の本家（子孫が現存）があり、この旅で彼が本家を訪れていることである。佐太郎は本家に逗留中に町屋村の浜（現在の町屋海岸）を見物し、酒に酔って海に入って泳いだことも記されている。

（八賀穂高）

8、忍秘伝　しのびのひでん

忍術、写、半紙本（24.3cm×16.9cm）、4巻1冊、服部半蔵編、原本永禄3年（1560）成、昭和46年（1971）複製出版、（上野市）沖森書店版、伊賀連携フィールド789.8/Sh 85。

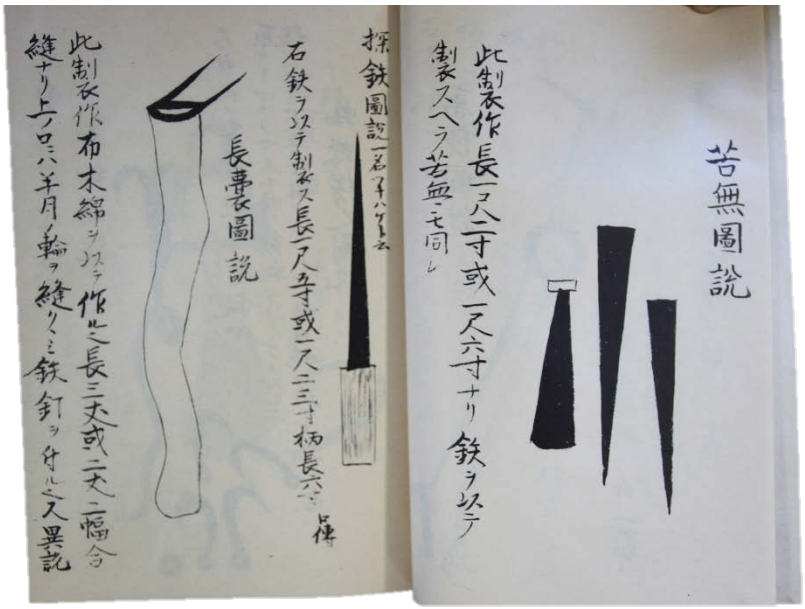


展示本は伊賀の古書肆で郷土史家の沖森直三による複製本で、原本は伊賀流忍者博物館が現在所蔵。伊賀甲賀伝記、忍道具秘法、忍秘伝之道具、忍出之立秘伝之事など4巻77項目よりなる忍術書。本書中の伝来によれば、最初は永禄3年服部半蔵（保長か）が息子の服部半蔵（正成か）に伝えたもので、以後服部一族を中心に伝授され、承応4年（1655）に服部美濃辺三郎が清書し、享保16～18年（1731～33）頃に加藤作左衛門が伝授されたようである。一子相伝の秘事とされている。最初から現在の形であったとは考えにくく、伝授を経て17世紀後半より現在の内容に整理されていったのだろう。忍道具秘伝には蒔菱（まきびし）や宮内（くない）など、フィクション忍者作品に頻繁に登場する忍者道具が収録される。

（福島嵩仁）

9、万川集海　ば(ま)んせんしゅうかい

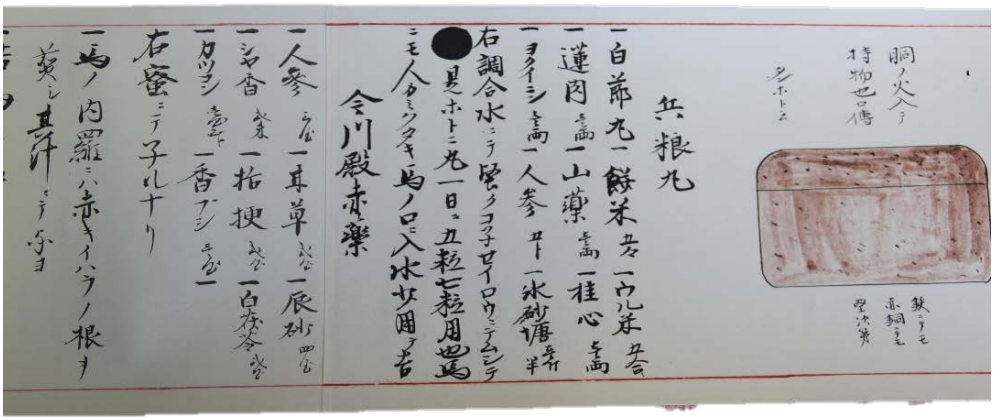
忍術、写、半紙本（23.8cm×17.0cm)、23 巻 11 冊、藤林保義（武）編、自序（延宝 4 年(1676)）、昭和 50 年(1975)複製、(甲賀市）誠秀堂版、伊賀連携フィールド 789.8/F 56。



甲賀の大原家勝井氏が所蔵していた『万川集海』を石田善人が複製した本。忍術をまとめた「万川集海」22 巻と合戦の心得を記す「軍用引（秘記)」1 巻で構成される。伊賀甲賀に伝わる忍術 49 流を集大成し、量・質ともに秀でた忍術百科事典とでもいうべき忍術書。忍者としての心構えや忍術・忍具のほか、忍びを使う「将」の心得までをも収録している。三重大学国際忍者研究センターが解析した江戸中期の伊賀者の誓約書（木津家文書）によれば、『万川集海』の忍者を使う心得などを書いた「序」や「正心」などは主君や家老に見せてよいとする一方で、「秘術」は書き写さないことなどを約束している。内閣文庫本、沖森文庫本、伊賀市上野図書館ほか、伊賀甲賀の家々など 15 種ほどの伝本が知られている。（福島嵩仁）

10、老談集　ろうだんしゅう

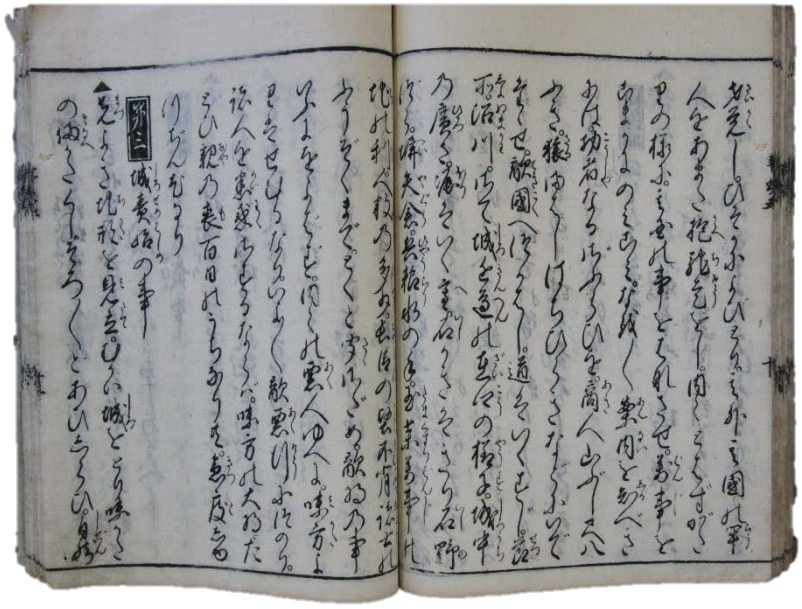
兵法、写、巻物（縦 18.0cm×6m64.9cm)、1 本、馬淵類右衛門編、弘化 2 年(1845)成、昭和 60 年（1985）復刻、(甲賀町）誠秀堂版、伊賀連携フィールド 399/B 12。



昭和の忍術研究家の名和弓雄が原書を所蔵していた忍術書の複製。『甲賀流忍法伝書老談集』とも。武田信玄の軍師山本勘助と武将馬場美濃守（信春）が詮議したとされる馬術と忍術に関する秘伝を馬淵類右衛門が飯倉健之助に授けたもの。馬術に関する内容が多い。世間に忍者の携帯食として認知される「兵糧丸（ひょうろうがん)」の調合法はこの書物による。（福島嵩仁）

11、軍法極秘伝書　ぐんぽうごくひでんしょ

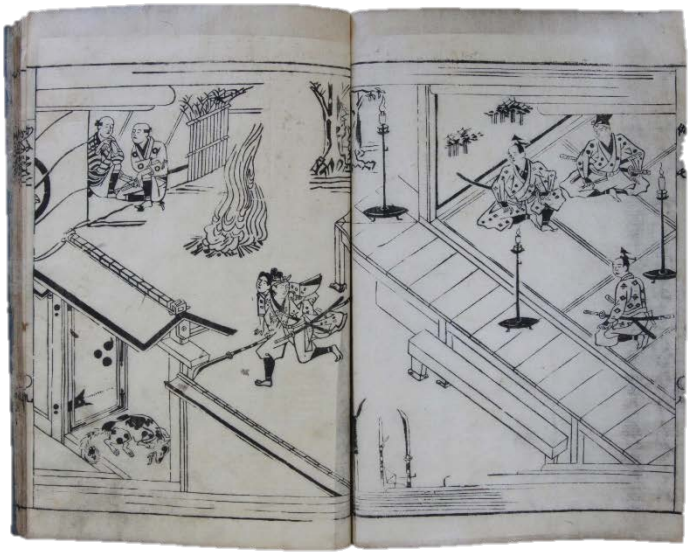
軍学書、刊、半紙本（26.5cm×横 19.0cm）、15 巻 7 冊、竹中重治原著・竹中重門著、慶安 2 年(1649 年)刊、（京）西村又左衛門版、今野氏旧蔵、月瀬文庫旧蔵、伊賀連携フィールド 399/G 94。



豊臣秀吉の軍師として知られる竹中重治（半兵衛）の著した軍学書を重治の長男・重門（久作）が筆写・後注したものを、京都寺町誓願寺の西村又左衛門が「新板刊」したものである。もともと、出羽国庄内藩士今野収助正路の蔵書で、今野による重門に関するメモも記されている。後に月瀬文庫（国語学者中田祝夫）に所蔵されることとなった。「軍法極秘伝書」は軍学書であるが、巻 5 の 2「城をはかる事」には「巧者なるさふらひ」を商人・山伏・尺八吹き・猿回しなどに変装させて敵国につかわし様々な情報収集にあたらせることが記してあるが、これは忍びの変装術の「七方出」によく似ている。今回展示する史料には、「軍用匹用伝」（「匹夫」の戦時の心得等百ヶ条が記載）、「単騎始末略」（戦用意から出陣・門出・行軍・鬨の声などについて方法が記載）の 2 点がともに伝来している。（八賀穂高）

12、伽婢子　おとぎぼうこ

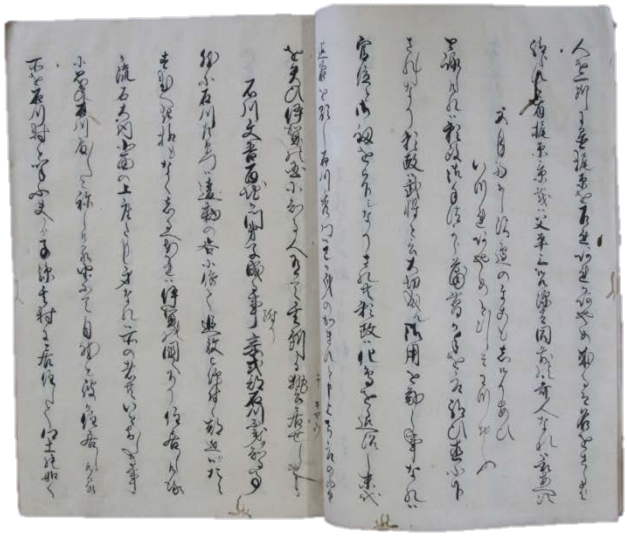
仮名草子、刊、半紙本（22.5cm×15.8cm）、13 巻 6 冊、浅井了意作、元禄 12 年（1699）刊、（京）中川茂兵衛版、伊賀連携フィールド 092.1/Ko 83/1。



短編怪異集で全 68 話のうち「飛加藤」「窃の術」が忍者・忍術に関わる。全編を通じ中国志怪小説の翻案がほとんどで、「飛加藤」「窃の術」は『五朝小説』「剣侠伝」を参考にしているが、翻案元の剣侠は日本にいないため、同じく超人的な能力をもつ忍者に置き換えられた。「飛加藤（加藤段蔵）」に関する最初のまとまった話であり、「窃の術」とともに「忍者が忍術をつかって大事なものをとって戻ってくる」という近世忍者小説の典型的内容である。初版は寛文 6 年（1666）刊の 13 巻 13 冊の大本で、展示本は再版の半紙本で内容や挿絵が一部割愛されている。（吉丸雄哉）

13、賊禁秘誠談　ぞっきんひせいだん

実録、写、半紙本（23.3cm×16.7cm）、3 巻 3 冊、寛政 11 年（1799）写、
伊賀連携フィールド 913.56/Z 5/1-3。

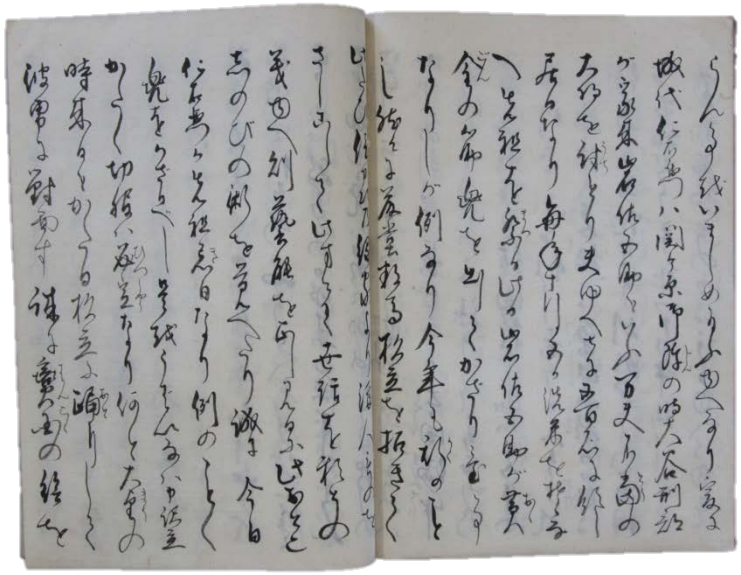


盗賊で忍術使いの石川五右衛門を主人公にした実録体小説。実録体小説とは出版できない内容を含むため、写本で流通した歴史小説。写本で流通したため内容に異同があるが、伊賀の石川村出身（伊賀市石川）の石川文吾が郷士百地三太夫に忍術を教わり、その後日本無双の大盗賊になる。豊臣秀次配下で弟子の木村常陸介の頼みで秀吉の寝所の千鳥の香炉を盗もうとするが失敗して捕らえられて処刑されるのが大筋である。石川五右衛門は安土桃山時代に実在したと思われる盗賊で、出身地は伊賀のほか河内・遠江・丹後など諸説ある。創作では井原西鶴『本朝廿不孝』（1686）や人形浄瑠璃・歌舞伎に盗賊として登場していたが、忍術を使う姿が描かれたのは 18 世紀前半に成立した『賊禁秘誠談』が最初である。

（吉丸雄哉）

14、伊賀越物語　いがごえものがたり

実録、写、半紙本（23.0cm×16.9cm）、20 巻 10 冊、著者不明、江戸後期成、楽山文庫旧蔵、
貴重書庫 092.6/I 22。

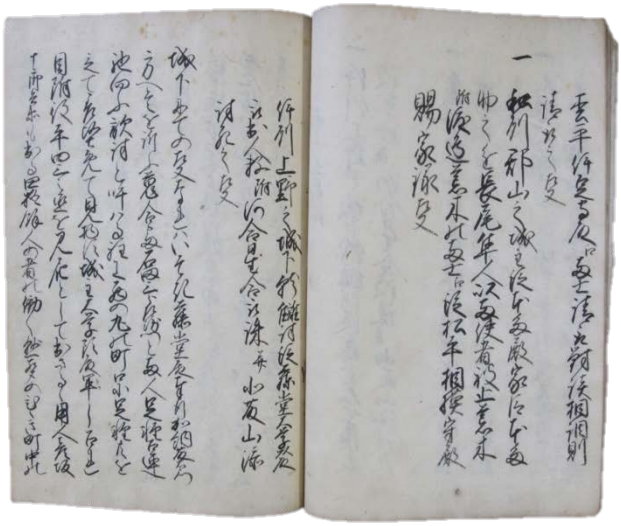


題名は 15『殺法伝（転）輪』と同様の荒木又右衛門の伊賀越仇討物を思わせるが、寛政 8 年末（1796）に津藩伊勢領で起こった大規模一揆を題材とする。この一揆に関しては「伊賀者」が情報収集に従事し、沢村甚三郎が「御蜜用相勤候扣」という記録を残したことが伝わっているが、そういった現実的な忍びの活動ではなく、重宝の兜を忍術により奪取しようとするきわめて類型的な忍者が描かれている。展示本は郷土史家鈴木敏雄の旧蔵本。他に三康図書館と伊賀流忍者博物館にしかない。

（吉丸雄哉）

15、殺法伝（転）輪　さっぽうてんりん

実録、写、半紙本（24.4cm×17.0cm）、5 巻 2 冊、著者不明、寛政 12 年（1800）写（安部）、伊賀連携フィールド 913.56/Sa 68/1-5。



寛永 11 年（1634）11 月 7 日に伊賀上野鍵屋の辻（現伊賀市小田町）において荒木又右衛門（1599-1638）が義弟を助けて河合又五郎を討った伊賀越仇討は、日本三大仇討の一つとして高名である。

この事件に関して流布した実録体小説が『殺法転輪記』と呼ばれる作品群である。写本で伝播したため異本が多い。展示の伊賀連携フィールド本のほかに附属図書館蔵本（貴重書庫 092.08/Sa 68）が三重大学には存在する。　（吉丸雄哉）

編集後記

本展示の企画・制作は本図書館研究開発室兼務教員の人文学部吉丸雄哉教授が行いました。解説・解題執筆は吉丸雄哉教授と人文学部社会科学研究科大学院生西村佳朗・福島嵩仁・八賀穂高が行いました。展示品は附属図書館と伊賀連携フィールド国際忍者研究センターの所蔵品です。

参考文献

『参考伊乱記』菊岡如幻著・入交省斎著・沖森直三郎編、沖森文庫、1975。
山口正之『忍者の生活』雄山閣出版、1963、書庫 789.8/Y 24。
『万川集海：完本』[藤林保武著]；中島篤巳訳註、国書刊行会、2015、開架 789.8/F 56。
山田雄司『忍者の歴史』KADOKAWA、2016、展示棚 789.8/Y 19。
『伊賀市史』2 巻「通史編近世」、伊賀市、2016、開架 092.1/I23/2。
『伊賀市史』5 巻「資料編近世」、伊賀市、2012、開架 092.1/I23/5。
『伊水温故』菊岡如幻編、上野市古文献刊行会編纂、1983、開架 092.6/I85。
『角川日本地名大辞典』24 巻「三重県」、角川書店、1983、開架参考 291.03/KA14/24。
『日本名所風俗図会』16 巻「諸国の巻」、角川書店、1982、人・日本語日本文学 291.08/N77/16。
『講談社日本人名大辞典』講談社、2001、開架参考 281.033/Ko19。

・高尾善希「本学の地域史偶然発見」（読売新聞オンライン「三重大学発！忍び学でござる」2018/11/07）（最終閲覧日：2019/05/28）
https://www.yomiuri.co.jp/local/mie/feature/CO031511/20181107-OYTAT50000/
・西尾市岩瀬文庫　古典籍書誌データベース「岩瀬文庫蔵書　目録一覧」
https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11C0/WJJS02U/2321315100
史料 7911「＜古今＞名なし草」、7912「百姓喩草」の編者に今野収助（正路）の名が見られ、今回展示の「軍法極秘伝書」ほか 2 史料の旧所蔵者と同一人物であると推定する。